

非漢字系の漢字関連文字

吉池孝一

一

中国の周辺に位置する現在と過去の文字のうち、漢字に由来する文字群および漢字と関連の深い文字群を「漢字関連文字」と呼び分類すると次のようになる。

■漢字関連文字

1. 漢字系文字
 - a. 変用文字(万葉仮名、侗族の文字など)
 - b. 変形文字(字喃、壮族の文字など)
 - c. 派生文字(仮名、女書)
2. 擬似漢字系文字(契丹文字、西夏文字、女真文字など)
3. 非漢字系文字(ソグド系文字、パスパ文字、ハングルなど)

漢字に由来する文字群については西田龍雄 2002¹を参考にして用語をやや改め、新たに非漢字系の文字群を加えて諸文字の関係を示した。その中身は、漢字から作られた漢字系文字、漢字に似せて創製された擬似漢字系文字、漢字と系統を異にするが関連のある非漢字系文字からなる。この枠組みは、文字の系統分類を利用しているが、文字の系統分類ではない。文字組織全体から見た漢字との関連性によって分類を試みたものである。ここで言う文字組織は、字形を形作る文字要素と文字、文字要素を組み合わせる文字を作る方法、文字を互いに区別したり同類に纏めたりする方法²、表音と表意の方法、縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法よりなる。

以上は漢字関連文字の全体である³。漢字系文字については『KOTONOHA』49号⁴で、擬似漢字系文字については『KOTONOHA』50号⁵述べた。本稿では非漢字系文字についてやや詳しく述べる。

二

非漢字系の漢字関連文字は、字形は漢字と系統を異にするが、文字組織のいずれかに於いて漢字の影響を被った文字である。

まず、7世紀頃から現代に至るアジア北部のソグド系文字を挙げる事ができる。ソ

グド文字はソグド語を記した文字である。アケメネス朝ペルシアの公用語であったアラム語を記したアラム文字に発する。西方よりアジアの北部へと伝わった。ウイグル文字（9～14世紀）、モンゴル文字（13世紀～今に至る）、満洲文字（17～20世紀）と改良されながら伝わり、現在の中国新疆ウイグル自治区の錫伯(シボ)族のシボ文字や中国内蒙古自治区のモンゴル文字となった。これらの文字をソグド系文字と称する。単音を表わす表音文字である。

さて、アラム文字は右から左に横書きされた。ソグド文字も同様であったが、6世紀末の碑文に縦書きされたものがあるという⁶。7世紀前半、玄奘の『大唐西域記』にもソグド文字は縦に書かれるとの記述がある⁷。文書類での縦書き横書きの判断は困難であるから、7世紀前半の西トルキスタンでは縦書きであったとする玄奘の証言は貴重である。なぜ縦書きが現れたか、定説はないようであるが、これを漢字漢文の影響とする見方もある⁸。そのため漢字関連文字としたが、適否は後の課題である。

次のウイグル文字（9～14世紀）になると、初期のものを除き大部分は縦書きされるという⁹。縦書きであるのは、7世紀前半以降の西トルキスタンのソグド文字の習慣によったものと考えてよいのであろう。縦書きといっても行の方向は漢字漢文とは逆で、左から右に進む。これ以降のソグド系文字は全て縦に左から右に綴られた。その結果として、書物や碑文の上でソグド系文字と漢字漢文を併記することが容易になった。

なお満洲文字（17～20世紀）には篆書体もある¹⁰。未だ精査していないが、ソグド系の諸文字のうち、篆書体を持つのは満洲文字だけであるようにおもう。これも漢字篆書体に学んだものである。

三

13世紀にはパスパ文字¹¹が作られた。フビライがチベット僧パスパに命じて作らせ、元（1271～1368年）建国の直前1269年に公布したものである。フビライ統治下の諸言語を表記するためと言われる¹²。これまでにモンゴル語、漢語、チュルク語、チベット語、サンスクリット語を記したものが発見されているが、現存する資料の大半はモンゴル語と漢語である。チベット文字を漢字風に角ばらせて作った文字で、単音を表わす表音文字となっている。字形を方形にまとめる点、一音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応した分ち書きがない点は漢字の影響である。縦に左から右に綴る点はモンゴル文字の影響である。モンゴル人は、パスパ文字を作る前より、ウイグル文字に発するモンゴル文字（ウイグル式モンゴル文字ともいう）で自分達の言葉を書いていた。パスパ文字作製後は、文字をパスパ文字に置き換えて文章を綴った。結果としてモンゴル文字より書写の方向を受け継ぐこととなった。パスパ文字は元一代に渡って使用され、

元の滅亡とともに公式には文字使用の伝統も絶え、解読の必要な文字となった。解読といっても、チベット文字の知識とこの文字の歴史的な背景に対する理解があれば比較的容易であったため、19世紀中頃にはヨーロッパ人によって本格的な解読がなされていた¹³。なお、パスパ文字には篆書体がある。これも漢字篆書体に学んだものである。

四

15世紀にはハングルが作られた。李氏朝鮮の第四代世宗の命によって1443年に作られ1446年に公布された。字母は単音を表わす表音文字であるが、それを音節単位に組み合わせる。表音文字であるところはパスパ文字などに原理を学び、音節毎に組み合わせる。文字単位をなすところは漢字に学んだとされる¹⁴。なお初期のハングルが縦に右から左に綴られた点、一音節毎の切れ目はあるが単語など意味の切れ目に対応する分ち書きがなかった点も漢字組織の影響であろう。

五

以上、中国周辺の漢字関連文字を概観したが、周有光1989¹⁵には類似の文字の枠組みが既にある。周有光1989は、字形の系統、文字を構成する点画の用法、方形であるか否かという文字の外形によって、東アジアの19種の文字¹⁶を「漢字式文字」としてまとめ、その発展を論じた。字形の系統だけでなく文字の形式も含めて枠組みを設定したところは、西田龍雄1981¹⁷と同様である。そこに含めた文字の範囲は西田龍雄1981より一層広がっているが¹⁸、これもやはり系統分類の一種であろう。

本稿で扱った文字種は周有光1989と大差ないが、漢字関連文字は文字の系統分類ではない。漢字に由来する文字は当然のこととして漢字と関連のある異系統の文字もできる限り取り込む。この枠組みは、周辺の民族がどの様に漢字に近づき、どの様に漢字から離れたかという問題を検討するために設けたものである。異なる民族の接触から何が生れたか文字組織をとおして見てみよう、ということでもある。

1 西田龍雄 2002『アジア古代文字の解読』（中央公論新社。もと『アジアの未解読文字』大修館書店、1982年）の付記による。281-282頁参照。

2 文字の区別（示差）として、平仮名の「ろ」と「る」、「わ」と「ね」、「め」と「ぬ」などが同じ手順で区別されていることを挙げるができる。この指摘は西田龍雄1987「漢字の生成発展と“擬似漢字”の諸相」『書道研究』（1987:9、31-41頁）にある。文字を同類にまとめる（示同）方法として「だ、ば、が」などの濁点がある。このような示差と示同の機能により文字組織の一部である字形は緩やかな体系をなしている。

-
- 3 吉池孝一 2006「中国周辺の漢字関連文字について」『KOTONOHA』48号、23-27頁参照。
- 4 吉池孝一 2006「中国周辺の漢字系文字」『KOTONOHA』49号、25-30頁参照。
- 5 吉池孝一 2006「中国周辺の擬似漢字系文字」『KOTONOHA』50号、1-6頁参照。
- 6 吉田 豊 2003「ソグド文字とソグド語」『NHK スペシャル文明の道 ③海と陸のシルクロード』日本放送出版協会、90-99頁にモンゴリアで発見されたブグト碑文と玄奘の話が紹介されている。
- 7 『大唐西域記古本三種』（中華書局影印、1981年）の敦煌本残巻によると「自素葉水城至羯霜那國、地名率利、人亦謂焉。文字語言、即随稱矣。字源簡略、本二十餘言。轉而相生、其流浸廣。粗有書記、豎讀其文。」とある。水谷真成訳注『大唐西域記1』（平凡社、1999年）の訳によると「素葉城より羯霜那国に至るまで、地は率利と名づけ、人も亦しか謂う。文字・語言は即ち随って稱す。字源は簡略にして本二十余言。転じて相生じ、其の流れ浸く広し。粗書記有り、豎に其の文を読む。」（286頁）とある。注には「ソグド文字はシリアのアラム文字を基にした文字であり、このソグド文字からウイグル文字が案出された。通常横書きされるが、玄奘のいう「その文を豎読みする」書き方もあった。」（59-60頁）とある。注は「書き方もあった」とするが、『大唐西域記』の表現をみるかぎり、玄奘が訪れた西トルキスタンでは普通には縦に書かれたということであろう。
- 8 庄垣内正弘 2001「ウイグル文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年、118-121頁参照。
- 9 注38の庄垣内正弘 2001を参照。
- 10 汪玉明 1993, 1996「満文篆字研究（上）（下）」『中国民族古文字研究（第二輯）（第四輯）』天津古籍出版社、288-290頁（上）、43-63（下）頁参照。
- 11 パクパ文字とも称される。吉池孝一 2005「パスパとパクパ」『KOTONOHA』30号、8-12頁参照。
- 12 『元史』卷二百二「釈老伝」に「帝師八思巴者、土番薩斯迦人、……。中統元年、世祖即位。尊爲國師、授以玉印。命製蒙古新字。字成上之。……。至元六年、詔頒行於天下。詔曰「……。故特命國師八思巴、創蒙古新字、譯寫一切文字、期於順言達事而已。自今以往、凡有璽書頒降者、並用蒙古新字、仍各以其國字副之。」……」とある。
- 13 中村雅之 2006「パスパ文字漢語研究の黎明—19世紀西洋人の研究」『KOTONOHA』

46号、1-3頁参照。

- ¹⁴ 大江孝男 2001「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年、760-773頁）を参照。なお、ハングルの成立にあたって、何を参照したかという点につき、パスパ文字説と契丹小字説がある。古くは白鳥庫吉 1897「吏道・諺文」『史学雑誌』第八編第一号（『白鳥庫吉全集 第三卷 朝鮮史研究』岩波書店、1970年所収、107-113頁）にパスパ文字説がある。Alexander Wylie.1859, “On an Ancient Inscription in the Neu-chih language,” *JRASVI*,1859 ,pp.137-153) に契丹小字説がある。もっとも後者は契丹小字を女真文字と誤解する。
- ¹⁵ 注 17 の周有光 1989 を参照。
- ¹⁶ 漢語漢字、江永婦女字（女書）、壮字、布依字、侗字、水字、白字、哈尼字、彝字、傣僳字、瑶字、苗字、西夏字、契丹大字、契丹小字、女真字、朝鮮文（ハングル）、喃字、日文。
- ¹⁷ 西田龍雄 1981「東アジアの文字」『講座言語 第5巻 世界の文字』西田龍雄編、大修館書店、216-278頁参照。漢字系文字の中に契丹文字、西夏文字、女真文字を加える。
- ¹⁸ この構想は早くは周有光 1987「漢字文化の歴史と将来」（『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編著、大修館書店）の附註に見える。